

Journal of Chubu University Education

No. 21
2021

【教育スケッチ】

《海外便り》

新型コロナウイルス対応に見るアメリカ文化

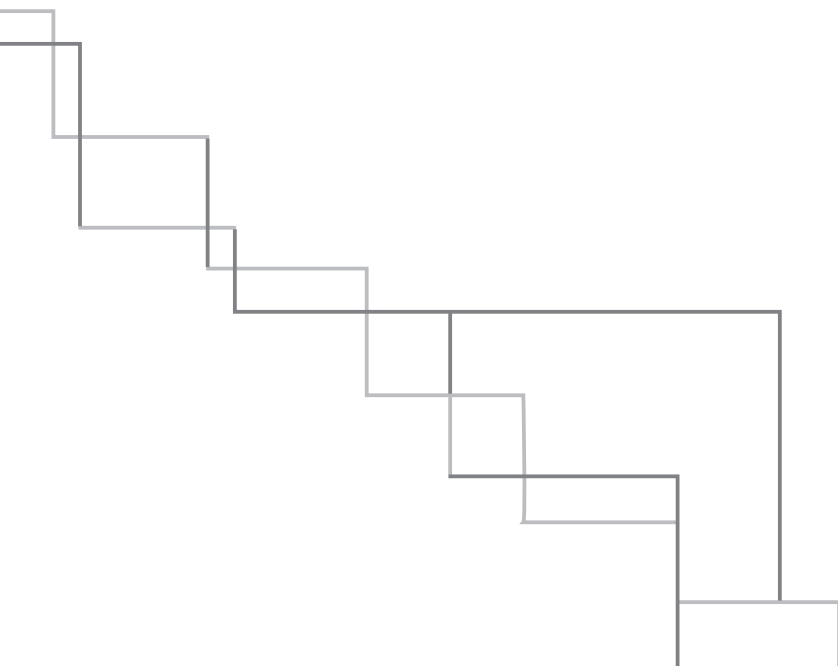
ーオハイオ大学でのサバティカルを振り返ってー 塩澤 正

【Educational Essay】

American Culture Reflected in the Chaos of Covid-19:

A Report of my Life on Sabbatical Leave at Ohio University, Athens, Ohio

..... SHIOZAWA Tadashi



新型コロナウイルス対応に見るアメリカ文化 ーオハイオ大学でのサバティカルを振り返ってー

塩澤 正^{*1}

1 はじめに

2021年4月から9月にかけて約半年間、本学の「特別研修制度」（サバティカル研修制度）を利用して、米国アセンズ市のオハイオ大学で研究を行う貴重な機会をいただいた。世界的に新型コロナウイルス蔓延の真っ只中であったため、様々な障害や制限があったが、コロナ禍であるがゆえに浮き彫りになったアメリカ人の志向や価値観を実感できたという利点もある。本稿の前半では、コロナ対応や人々の反応で、はっきり見えたアメリカ人の志向、特に「弛緩志向」「自由志向」「主張志向」に関して、アセンズ市民の生活や学内の様子などを例にして報告させていただきたい。後半ではオハイオ大学と中部大学の提携50周年関連の話と私のサバティカル中の研究について簡単に報告する。

2 オハイオ大学とアセンズ市

まず、ご存じの方も多いかもしないが、オハイオ大学とアセンズ市についてごく簡単に紹介してみたい。

オハイオ大学はアパラチア山脈以西（入植当時はフロンティア地域）では最も歴史のある大学であり、1804年に設立されている。今年で創立217年になる。メインキャンパスのあるアセンズ市には、約20,000人の学生が通っている。他にもオハイオ州南東部の主要都市を中心に5つのブランチキャンパスと2つのサテライトセンターも持っている。隣町のアルバニー市にはオハイオ大学所有の空港があり、航空工学教育の拠点にもなっている。コミュニケーション学やスポーツ経営学で有名な大学だが、最近は医学部も注目を浴びている。私が滞在していた時期にも、アセンズキャンパスには立派な医学部棟が完成し、コロナ禍にある学生のための保健センターとしての役目を果たしていた。数年前には州都コロンバスの北西の高級住宅地として知られるダブリン市に、医学部を中心とする総合教育センターキャンパスを開校している。

中部大学も広くて美しいキャンパスが自慢だが、オハイオ大学に行くと「広くて美しい」とはこういう大学を言うのだ、と思い知らされる。キャンパスの広さは1,800エーカーというから、7,285,000平方メートル

である。これは本学（430,000平方メートル）の約17倍である。キャンパスの建物はレンガをふんだんに使ったコロニアル様式で統一され、歴史を感じさせてくれる。キャンパス内に150棟ほどの建物があるがそのうちの約50棟は寮であり、1・2年生の生活の拠点となっている。9ホールのゴルフ場、27,000人収容のフットボールスタジアム、13,000人を収容するドーム状のホールなどが、大樹と芝生の中に点在する本当に美しいキャンパスである。オハイオ大学は全米でも最も美しいキャンパスランキングでは常に上位であり、*USA Today*紙では、2016年と2019年、アセンズ市は大学町としての全米で最も美しいキャンパスタウンとして紹介されている。



図1 オハイオ大学の桜並木

実はこれには中部大学も一役買っている。ご存じのように、オハイオ大学の創立175周年の記念の年に本学から175本のソメイヨシノ桜の苗木を贈った。200周年（2004年）には25本の苗木を追加して贈呈した。今では大学の脇を流れるホッキング川の土手には200本の桜並木ができ（図1参照）、ナショナルジオグラフィックやデトロイト日本領事館の公式サイトで、ワシントンDCと並んで、アメリカでの桜の名所として紹介されている。今や、大学関係者のみならずアセンズ市のシンボルであり、市民の自慢なのである。

オハイオ大学（OU）は、フットボールや医学研究で有名な、あのオハイオ州立大学（OSU）と頻繁に

^{*1} 人文学部 英語英米文化学科 教授

間違われるのだが、その教育の質や社会への貢献度では決して引けを取らない。実際、オハイオ大学のニックネームはThe Ohio University、あるいはHarvard of Appalachia であり、オハイオ州を代表する大学はオハイオ大学であると自負している。事実、2009年のノーベル化学賞受賞者Dr. Venkatraman Ramakrishnanは、オハイオ大学大学院の卒業生であり、その指導教員は本学の初代国際センター長である故田中知安先生である。このように、オハイオ大学は確かにオハイオ州を代表する最も歴史ある大学であり、様々な意味で卒業生、地域住民、在学生の自慢なのである。

実質的にも世間の評価は上向きであり、U.S. News and World Report によるThe Best Value Schools rankingでも、2020年と2021年には“The #1 Best Value School in the State among national public universities”として選出されている。これは、授業料、学生の満足度、教育の質、学生と教員の割合などの17項目の調査結果であり信頼性も高い。しかもコロナ禍でこのような評価を得ているのは、その対応も高く評価されていると言える。

こうやってみると、オハイオ大学は、本質的な意味で「学生に寄り添う大学」であり、私たちが想像する以上に「良い大学」である。ある意味、本学とよく似ているのではないだろうか。まさに、「姉妹大学」という呼び名で呼ぶのにふさわしい関係かもしれない。

アセンズ市について簡単に紹介する。アセンズ市は州都コロンバスから南東に車で1時間半ほどの位置にあり、3万人（周囲の小さな町を合わせても6.5万人）ほどの人口を持つ典型的な地方型の大学町である。アパラチア山脈の最西端の緑豊かな丘陵地帯に位置し、まるでリゾート地のような雰囲気がある。大学がアセンズ市の最大かつ唯一の産業であり、市内は大学関係者とそれに付随する産業（建築、メンテナンス、初等・中等教育、公務員、サービス業）に従事する人達が多く、大学と町が地理的にも経済的にも一体化している。

上記のように大変美しいカレッジタウンであり、メイン通りであるCourt Streetはレンガで舗装しており、馬車が走っていても違和感がないかもしれない（図2参照）。この両側には古いレンガの建物が並び、銀行、本屋、昔ながらの映画館、コーヒESHOP、それにたくさんの学生ご用達のバーが並ぶ。少し中心街から歩けば、ローカルレストランや自然食品店、弁護士が営むパン屋、町の図書館や博物館、スケートボード場、市民プール、遊歩道を兼ねるバイクパスなどもあり、学生にはこの上ない理想的な環境である。学生証を見せると無料になる小型バスで10分ほど走るとウォールマートやモール、様々なファストフード店、自動車

ディーラー、シネマコンプレックス、スポーツレストランなど、アメリカのどこの町にもあるような景色も目にする。

大学関係者は民主党を支持する人が多いため、アセンズ市はほぼ民主党の牙城である。アセンズ市民とビールを飲めばトランプ氏の悪口で盛り上がる。ただし、City Limit（建物が密集する地域の外で税金も違う）を一步出れば、畑にはTRUMPと書かれた大きな看板があり、共和党を支持する農業従事者や家族経営の小さな会社の関係者に会うことも多い。アセンズ市より南部はアメリカでも有名な貧困地域であり、世界に目を向けた自由貿易や多様性の重視というような政策はこの住民には響かない。ここはいわゆる「Poor White Area」であり、Poverty Rateはここ数年30%を超えている。このような人の中にはAmerica Firstを掲げたトランプ前大統領の返り咲きを本気で期待している人も少なくない。車で南に下れば下るほど、スーパーなどでマスクをつけている人が少なくなるのは、貧困と不満の表れでもあるようにも思える。



図2 レンガ舗装のCourt Street

3 コロナ対応に見るアメリカ文化

ここからは、コロナの対応にみるアメリカ文化を私のアセンズ市での生活と観察を通して、振り返ってみたい。

3.1 出発から米国到着まで

まず、出発前から時間を追っていく。オハイオ大学の受け入れ先から招待状は年末までに届いたものの、ビザ取得のために必要なDS-2019という書類が手元に届いたのは2月に入ってからであった。予想はしていたものの、「弛緩志向」の強いアメリカ人の悠長な仕事ぶりに悩まされた。何度かメールで丁寧に急がせてやっと手に入れた。出発は4月1日であるが、すでに郵便事情などを考慮すると間に合わない可能性の方が高かった。すぐに大阪のアメリカ領事館にビザ申請の予約を入れようとしたが、コロナ禍で人数制限があり、

やはり間に合わないことが判明した。急遽、東京の大使館でなんとか面接予約を入れたが、審査に1-2週間、郵送で1週間かかることを考えるとビザ入りのパスポートが間に合うのかと大変心配した。万が一間に合わなければ、出発前3日以内のPCR検査や飛行機の予約をキャンセルする必要がある。それまでの長い準備の時間と金銭的な損失は大きい。同時に、愛犬の狂犬病予防接種と抗体価の確認にも2カ月近い期間を要した。大変な思いをしたので間に合ってほしい。そんな思いが天に通じたのか、何とか無事にビザ入りのパスポートが届き、PCR検査と英文証明書を法外な金額を払って発行してもらい、無事に4月1日にアメリカに旅立った。日本では第4波が大きくなり始めた頃である。

アメリカ到着後、国内線への乗り継ぎを拒否されることも覚悟していたが、何の問題もなくオハイオ州のコロンバス空港までたどり着いた。しかも、国内線では愛犬Juniorを機内に持ち込むことも許された。いよいよアセンズ市での10日間の自主隔離である。電話や保健所職員の訪問などがあることを予想していたが、何日たっても確認の電話の一本もない。留学生や他の在外研修者らに聞いても、そのような確認は全くないようだった。これがアメリカ人の「自由志向」や「弛緩志向」からくるものか不明だが、監視のほとんどない10日間の気抜けした、まさに「自主隔離」生活を過ごした。

余談だが、日本への帰国時には携帯に位置情報アプリ2本を強制的にインストールさせられ、毎日、ランダムな時間での位置情報の確認と動画送信が14日間義務付けられた。意図的に従わない場合は名前が公表されると言う。囚人になったような気分であった。

3.2 予防接種にみる「弛緩文化」

すでに2021年4月時点で、アセンズ市では成人の多くが予防接種を終えていた。ただ、私のような外国人はその対象外かと考えていた。ところが、確認するとアメリカ市民かどうか、保険の有無などとは全く関係なく、アメリカに在住する者は全てが接種対象であることが分かった。なんと不法滞在者でも無料で接種できるという。整理券などは必要ない。4月時点ではすでにほぼ全ての成人はネットで予約さえすれば、予防接種が受けられるという。しかも、ワクチン接種会場は、町の指定施設ならどこでもいい。その主な施設は病院や市民ホールなどではなく、町のどこにでもある薬局（pharmacy）である。医者や看護師はいないが、研修を受けた薬剤師が注射を打つ仕組みのようだ。私は小さな隣町のKrogerという大手スーパーの中にある薬局に申し込んだが、こんなところで大丈夫かと内

心は非常に不安であった。

当日、指定された時間にスーパー内の薬局の窓口に行き、書類を書き、レジの脇のパイプ椅子に座って順番を待った。すぐにそれらしき女性が現れて、笑顔で世間話をしていると、注射器を取り出した。まさか、ここで？と思ったのもつかの間、腕まくりをさせられ、あっという間に、パイプ椅子の上で予防接種が終わってしまった（図3参照）。腕の絆創膏はスーパーの宣伝の絵柄がプリントしてある。「記念写真は撮らないの？」と写真撮影まで促された。その後、10センチ四方ほどの紙に手書きで接種期日を書いてある接種証明？をもらい、15分ほどの待機で全ては終了した。あまりのカジュアルさに唖然とした。



図3 予防接種を受ける筆者

しかし、このアメリカ人の「弛緩志向」（カジュアル文化）が、予防接種の素早い実施を後押ししたのではないだろうか。「形式志向」や「緊張志向」の強い日本では、上記のような対応は絶対に許されない。まずは、国家レベルで長々と議論し、法律に対応して問題がないか確認し、不満がでないような仕組みを考え、やっと接種券を印刷して、地方自治体レベルで郵便や会社から配布し、対象者のみを順番に大きな施設に送りこむ。会場では、医師と多くのボランティアがその運営に当たる。一旦始まれば早いですが、始まるまでが異常に形式的であり、まじめ過ぎるがゆえに時間がかかる。

ところが、形式よりも、目的の実行性を重視するアメリカでは柔軟な対応がとりやすい。医者や看護師でなくても研修すれば注射は打てる、全国の薬局でやればいい、Social Security Number（社会保障番号）で管理しているので、証明書は手書きでいい、ワクチンが余ったところから予約なしで接種する、などなど発想が現実的だ。これなら素早く、全国民に予防接種を開始できるというものだろう。アメリカ人の「適当さ」は、日本人がアメリカで生活すると誰もが感じる悩みの種であるが、よく言えば大らかさであり、「心

の余裕」でもある。この「弛緩文化」が「医者や看護師でなければ注射は打てない」「それなりの施設でなければ実施できない」という固定概念を取り除き、ワクチン接種を素早く開始し、必要な人に届けることができた一因ではないだろうか。

3.3 「自由志向」「主張志向」が阻む予防接種

アメリカ人の「弛緩志向」はワクチン接種を一挙に国民に広めることを後押ししたが、アメリカ人が大切にする別の価値観である「自由志向」や「主張志向」が、これをスローダウンさせることとなったようだ。アメリカでは2021年7月頃に予防接種の接種率が50%を超えてから伸び悩んだ。ワクチン接種は自由意思であることは間違いないが、これを声高々に訴える共和党中心のリーダーたちが出てきたのである。オハイオ州でも州議会議員のScott Wiggam氏は、州立大学が学生にワクチン接種を義務づける、あるいは学生にワクチン接種の有無を聞くことさえも国民の自由を束縛するので憲法違反や差別にあたり、1件の事案につき5,000ドルの訴訟を起こすと大学を脅した。南部の州でも、会社や学校がワクチン接種を勤務や登校の条件とすることは憲法違反であるという州知事が現れた。さらに、ワクチン接種は「政府の陰謀」であり、マイクロチップと一緒に埋め込まれるとか、「磁石人間」になるというデマが流れ、それをまともに信じ込む人たちがでてきた。オハイオの州議会（健康委員会）では、医師が磁石人間説を肯定する証言をした。YouTubeではスプーンやナイフが体につく動画が多量に流れた。近所に住むピートさんは、アセンズ郡の共和党の重鎮だが、これはさすがにばかばかし過ぎると話してくれた。私は「あなたが仲間の共和党員にそう言えば、アセンズ市ではそういうことを信じる人はいなくなるはず」と言うと、苦笑いしていた。

しかし、笑えない数字がある。7月時点で予防接種に対して「懐疑的」だと答えた人は国民の20%にも上った。つまり、国民の20%は基本的に予防接種を拒否しているということである。日本では、健康に問題を抱える人を除き、ワクチン接種は当然だと考えるが、アメリカではそうはいかない。「建国の精神」で「自由」を高々に謳っているアメリカでは、私たち日本人の想像も及ばないほど、個人の自由の束縛を嫌がる人たちがいる。しかも、「主張志向」の強いアメリカ人は、どう考えてもおかしいと思えるこのような発想でも、大声で主張する人が多い。トランプ前大統領がそのいい例である。陰謀説に対抗して、民主党寄りのCNNのキャスターはこれをLunatic Conspiracy Theory（狂った陰謀説）と言って切り捨てた。もちろん保守的で共和党寄りのFOX Newsからはそのような発言

は出てこない。これほど、左から右まで、教養のある人も、ないような人も、自分の主張を立ち話、YouTube、デモ、テレビ、そして裁判で訴える。アメリカ文化については、自分ではある程度わかっていたつもりでいたが、これほどまで極端に現れるとは想像もしていなかった。不謹慎だが、これが面白くて、他人事のように、新聞やニュースを毎日横目で楽しんだ。

3.4 オハイオ大学でのコロナの影響と対応

さて、ここでオハイオ大学の新型コロナウイルスの影響とその対応をわかる範囲で紹介してみたい。

まずその影響だが、アメリカの他大学と同様にオハイオ大学も入学者の減少、それに伴う教職員の一時解雇で大きく揺れた。新型コロナウイルスの影響で世の中の経済状態が悪くなれば、入学者数も激減する。オハイオ州の州立大学はそれに加えて州政府からの補助金も大きくカットされた。留学生も激減し、オハイオ州で最も古く、質も高いとされるオハイオ大学の英語集中講座（OPIE）でも、英語をフルタイムで学習する留学生は、一桁台まで減少した。一時期は300名を超す留学生がいたという。残った教員は他学科や教養科目の授業を担当するなどの対応を求められている。



図4 教員を助けない学生たちが路上で訴える

大学の教職員は、2021年5月の学年末に一時解雇された者が140名に上った。これを教職員の間では"May Day Massacre"（メーデーの大量虐殺）と呼んでいた。これ以外にも終身雇用権（tenure track）のある教員の契約さえも更新されなかった人がいたという。図4のように、先生を慕う学生らは署名を募りその不正を訴え、小さなアセンズの町でもデモがあった。ネット上ではコロナ対策に名を借りた財政的失敗の穴埋めだという訴えを目にした。私のよく知る教員の中にも自ら別の大学に移籍した者や、契約を打ち切れ家を引き払う者もいた。ここにも「契約文化」や「競争文化」というアメリカ特有の文化が見え隠れする。

新型コロナウイルスへの大学の対応については、本

学出身の何人かの大学院生に状況を聞いてみた。授業に関しては、日本と同様に2020年の3月ごろからほぼ全てが遠隔になり、その後2021年の5月の春学期終了までそれが続いたという。今年の秋学期の授業は学生がキャンパスにもどり、全面的に対面授業となったが、遠隔授業もあると言う。

トランプ前大統領が「全て遠隔で授業を履修する留学生はアメリカに滞在する必要がない」という類の発言をしたことにより、2021年5月までは、大学で全面的に遠隔授業をしているにも拘わらず、留学生だけは、週に一コマのみ対面授業に参加することを余儀なくされるという対応を求められたという。もちろん、これには教員も必要であり、心ある献身的なOPIEの教員が留学生のために対応していた。本学からの留学生もこの恩恵により、継続して無事オハイオ大学に残ることができた。

この当時、キャンパスに出入りする学生は全員2週間に1度の割合で、PCR検査が求められていた。図5のようにキャンパス内の数カ所に検査場が作られ、ここで任意の日時に行けば無料で検査が受けられるという仕組みである。新しく完成した立派な医学部棟(Heritage Center)では、学生への予防接種も実施されていた。ただ、教職員やVisiting Scholarなどはここで受けることはできず、前述のように町の任意の薬局に行くよう指示された。



図5 寮の一角に作られたPCR検査会場

学内の建物内ではマスクが必須である。ただ、そう言うものの、入国当初は、自由の束縛を嫌うアメリカ人はこの規則を守らない者も多いのだらうと考えていた。ところが、4月に到着して以来、皆一様に建物内ではきちんとマスクを着用していたのには驚いた。ただし、建物を一步でるとマスクを着用している学生は稀であった。確かに屋外で誰とも話さず歩くだけでは感染リスクは少ない。このあたりは、とにかく街中ではマスクをせざるを得ない社会的プレッシャーの強い日本と、現実的な対応をとるアメリカ社会の違いか

もしれない。

オハイオ大学の学生は皆、黒い生地白い大学のロゴマークの入ったマスクを着用していた。聞いてみると大学がコロナ対策キットを配布し、その中にサニタイザーや温度計などとともに、黒いマスクが入っていたという。ファカルティーももらえると聞いたので、私も学生会館(Baker Center)の受付でIDを見せると一セットもらうことができた。黒いマスクの着用はやや気が引けたが、よいお土産になった。

学生会館にはスターバックスやカフェテリアが入っている。ここでもコロナ対策が徹底され、座席が間引かれていた。驚いたのは現金が使えなかったことであった。自分でクレジットカードをかざして、支払いをする。これで直接的な接触をできるだけ避けるということだろう。これも、クレジットカードが普及しているアメリカならではの対策である。



図6 オハイオ大学の野外での卒業式

5月末には図6のように卒業式が上述の大きな野外フットボールスタジアムで行われた。卒業生とその関係者2名のみに招待状が配付され、その所持者が参加できるというシステムだ。私はたまたまゼミの卒業生がオハイオ大学での2年間の大学院生活を終えて卒業するので、参加したいと考えた。半分諦めていたが、幸運なことに、彼のガールフレンドの招待者が来られなくなったということで、招待状を分けてもらい、このスタジアムでの野外卒業式に参加することができた。

一人一人名前が読み上げられ、巨大な電光掲示板に卒業生の顔写真が写しだされた。卒業式の時間の約80%はこの名前を呼ぶことに費やされ、全員が読み上げられるまで数時間はかかった。しかし、名前が読み上げられるたびに、その家族、友人などが奇声をあげ、興味深い風景であった。

2021年秋の新学期から完全に対面授業が始まり、1・2年生たちは寮に戻ってきた。学生らはルームシェアをするので感染が危惧されるが、オハイオ大学は、感染レベルとそれに応じた対応策を策定し乗り切ろうとしている。寮の感染度はレベル1～レベル4までYellow, Orange, Red, Purpleの4段階に分けられている。Yellowは感染者がいない状態である。Orangeは過去一週間で陽性者が1.0～4.9%の割合で確認された場合に発動されるが、寮生の対応はほぼYellowと同じで、マスク、社会的距離の維持、手洗いの徹底である。その違いは、「注意」か「徹底」だけである。5～9.9%の陽性者が確認されるとRedゾーンに入る。クラスターの発生は確認されていないが、ルームメイト以外の寮生との接触は制限され、寮生以外が寮に入ることができない。全員がPCR検査の対象となる。最高レベルのPurpleレベルは寮生の中での陽性認定者が10%を超えた状態である。自分の部屋を出ることはトイレや食事の受け取り以外は禁止される。実質的な部屋での隔離状態であるが、大学独自の自主隔離であり、まだ、保健所の指示による隔離ではない。

この寮の指針でも見え隠れするのがアメリカの現実的な対応である。日本では、寮で5%の数の陽性者が確認されれば、即刻閉鎖になるだろうが、オハイオ大学ではあくまで学内で対応するという考え方である。陽性者が出ることの当然のこととして受け止めて、それに対応するだけの仕組みを作っておくことが大切であるという発想なのだろう。田舎町、中規模程度の病院が市内に2つある、医学部がある、大学の診療所もある、市内のコロナ対応病床に余裕があるといった環境を持つ大学であるからこそ取れる対策かもしれない。

3.5 コロナ禍のアセズ市

繰り返すが、渡米前には、「自由志向」の強いアメリカ人はコロナ禍でもマスクをしない人が多いと考えていた。特にアセズ市のような田舎で、人口も少なく、広い場所では感染のリスクは他の地域と比べて格段に低くなる。スーパーに行っても日本のような人込みはほとんどない。移動は車が主であり、電車や駅のような人が密集する環境はほとんどない。「社会的距離」どころか「公的距離」でさえも十分に保たれている。実際、5月～6月にかけては、アセズ郡で一週間の新規陽性患者数の平均は一桁台まで下がっていた。

これははるかに愛知県よりよい環境である。このような環境では、マスクなどする人は少ないと考えたが、予想は覆された。どこのスーパーや銀行、免許証センター出張所などでも、誰もがまじめにマスクを着用していた。マスクを着けていない者には、マスクが建物の入口で支給されていた。入口で入場人数制限をするスーパーもあった。また、買い物カートは一台一台使用後はアルコール消毒をしてから、一人一人に殺菌されたカートのみを手渡すという仕組みになっていた。どこのお店でも、日本と同様に入口にサニタイザーがあり、手を消毒してから入店した。ある意味、日本より真剣な取り組みであり、それを真面目に守るアメリカ人をみて驚いたのを覚えている。

5月末頃になると、オハイオ州でも予防接種者の割合が50%を超え、徐々に世の中も緩和ムードになってきた。スーパーの前には、図7のように「ワクチンを接種済みの方はマスクは必要ない」旨のポスターが掲げられた。もともと屋外ではほとんどの人がマスクは着用していなかったのに、これで晴れてマスクは必要なくなったと喜んだ。だが、デルタ株の脅威が確認されてからは、これも1ヶ月ほどで、再度、屋内ではマスク着用が義務づけられた。これは町の議会で可決され、アセズ市民にはローカルケーブルテレビやローカル新聞で周知された。



図7 ワクチン接種者はマスク不要（スーパーの入口）

前述のようにアセズ市はほぼ大学と一体であり、知的な住民が多く、ワクチンやマスクの重要性をみな理解し、それに従っていたようだ。ただ、アメリカ全体では7月を過ぎても、予防接種率がなかなか上がらず、日本のテレビでも報道されたようにオハイオ州知事は新規ワクチン接種者の中から5名に約1億円、あるいは大学卒業までの授業料を免除するという懸賞までかけて、ワクチン接種を促していた。それでも、オハイオ州の保健所にあたるOhio Department of Healthの情報では、2021年10月15日時点で、オハイオ州のコロナワクチン接種率はいまだに54.78%であり、これ

以上、上がるのはなかなか難しいと思われる。今や、予約なしでどこでもワクチン接種を受けることができるにも拘わらず、約半数弱の人が接種をしないという選択をしている。今後、若年層や会社や大学で強制接種に応じる人以外は、接種しないということであろう。ただ、大学内のワクチン接種率は非常に高い。アセンズ市の統計は不明だが、オハイオ大学内では、教職員と学生を合わせて2021年9月15日時点で72.9% (The Post, 9/19/2021) である。

その後、オハイオ大学は上述のオハイオ州の州議会議員の脅しにも屈せず、11月15日より履修の条件にワクチン接種を義務づけている。これは教職員には英断として迎えられた。これにより、学内のワクチン接種率は急上昇すると思われるが、アメリカ全体としては簡単に接種率が上がるような要因はない。人の命がかかわっているにも関わらず、ワクチンを接種しない自由やマスクをしない自由を主張するアメリカ人がこれほど多いとは、アメリカと日本では自由や権利に関する価値観が大きく異なることを再認識しなければならない。

4 協定締結50周年を目前にして

言うまでもなく、オハイオ大学と本学とは、長くて太い協定関係を維持している。私もこの恩恵にあずかりオハイオ大学滞在中には、出会う人全てに非常によくしていただいた。受け入れ教員であるDr. Krzicはもとより、国際交流エグゼクティブディレクターのDr. Ji-Yeungにも折に触れて声をかけていただいた。言語学部のDr. Thompson、Dr. Oshita、Mrs. Krzicやアジア研究プログラムディレクターのDr. Suzuki、それに多くの職員に、私のみならず本学からの大学院留学生までが大変お世話になった。学期の始めと終わりには必ずcasual social gathering (気楽に近況を聞く会)を開いてくださり、私や中部大学からの大学院生らの生活を気にかけてくださった。図8のように5月のcasual social gatheringは感染予防のため野外であった。Dr. Krzicは毎週土曜日の朝にはFarmer's Marketでの買い物の帰りに私の玄関先まで立ち寄って、新鮮な野菜やアメリカの伝統的なお菓子などを届けてくださった。感謝である。

近所の住人たちはオハイオ大学関係者が多いが、散歩中に立ち話をする、あの川沿いの桜の木を贈った中部大学から私が来たとなると、急に笑顔になり感謝されたり、家の中にまで招待してくださった人もいた。中には日本語で「Shiozawa-sensei!」などと会うたびに声をかけてくれる教育学部の教員 (Dr. Alan Wu) もいた。氏は派遣交換教員として中部大学に来ることを望んでいた。中部大学とオハイオ大学との関係が学

内ばかりではなく、アセンズ市の市民全体に伝わりつつあると実感した。

私がサバティカル期間をオハイオ大学で過ごすことに決めた一つの理由は、実はオハイオ大学との今後の交流について話すことでもあった。ちょうどオハイオ大学と本学が1973年に提携を結んで以来、2年後の2023年に50周年を迎える。私がそれまで国際センター長であるかは別として、50周年という節目は提携の在り方や今後50年の新しい目標や新規プログラムなどを考えるのにいい機会であると考えた。また、50周年の記念行事について、今から相談する必要があると思ったからである。

さいわい、国際交流担当ディレクターのDr. Ji-Yeungや本学との関係の深い先生方とは何度か対面、遠隔、公式、非公式に今後の本学とオハイオ大学の関係や50周年記念行事について、忌憚のない話し合いを持つことができた。トップ同士の訪問や記念シンポジウムについては実現の方向で今後さらに話し合いを重ねていく予定である。



図8 Dr. Ji-Yeung (1番左)、Dr. Suzuki (右から2人目)と本学からの留学生たち

50年にも及ぶ長期の国際交流はそれだけで評価できるが、本学とオハイオ大学のように、合わせて2,000人を超える学生の交流や数十人に及ぶ教職員の派遣、それに最近のCOILプロジェクトなどに代表される協働授業や多くの交流事業などの長期的運営は、私の知る限り他大学では類がない。オハイオ大学でも中部大学を最重要協定大学と認識している。その節目の年にその重要な関係を再確認するのは大きな意味があると思う。何より、私が最もこの関係がユニークで意味があると思うのは、本学の学生とオハイオ大学の学生の間に、研修などをきっかけとして、継続的で本質的な意味での国際交流や国際理解が伸張されていることである。彼らは、ネットなどを使い、自由に交流関係を深め、日本語や英語、それに互いの文化を学び合い、中には結婚にまで至るような関係に発展している。

「オハイオ大学での留学生活がなければ、自分の人生は変わっていた」などと口々に語る学生も少なくない。卒業旅行に互いの大学を訪問したり、自分たちの長期海外研修参加10周年の年に、仲間を募り、オハイオ大学まで家族をつれて訪問したグループもいる。卒業後20年以上もオハイオで知り合ったアメリカ人学生と一緒に留学した仲間、それに本学やオハイオ大学の教員とSNSで繋がっているグループもある。他大学で散見する表面的で形式的な、お膳立てされた交流とは全く異質の本来の意味での国際交流がここにあり、国際理解が生まれている。

両大学の教員の間でも授業に互いの学生を招き入れ日本語や英語での交流がある。これが自然発生的に生まれる。これは本学とオハイオ大学との長い交流の中で培った教員や職員同士の信頼があるからできることである。これは本学が誇るべきであり、このようなパートナーがいることを心より幸運に思いたい。また、この関係を築いた先達たちにも心より感謝申し上げたい。

5 コロナ禍での研究

最後になったが、簡単にコロナ禍での私のサバティカル生活について報告したい。

このサバティカルは、今まで時間不足で中途半端に書き散らしていたものをまとめることが第一の目的であった。その研究テーマは「環境と言語習得の関係」であり、「国際英語論の教育的応用」である。加えて、不足していると思われる領域の一部を、本学からのオハイオ大学の大学院への留学生にインタビューすることで補おうとした。おかげで授業や日々の業務から解放され、研究が十分にまとまった。…と言いたいところであるが、まとめればまとめるほど、この程度でいいのかという思いが強くなり、いまだに十分にまとめ切れていない。加えて、10年越しに書き溜めてきた別の研究が、このサバティカルでさらに膨れ上がり、どこで切りに行いいのか、分からなくなってしまった。あと半年サバティカル期間が欲しいところであるが、そのようなことは、口が裂けても言えない、いや言わない。

そんな中でもこの半年の間で成果となって実りそうなものも2つある。一つは上述の10年越しの研究から教科書が1冊生まれたことと、受け入れ教員であるDr. Krzicとの共同研究が始まったことである。後者はDr. Krzicと定期的に様々なことを話し合い、オンライン授業のゲストスピーカーとして、先生の授業に参加している中から生まれてきたものである。

ただ、残念だったのはオハイオ大学の教員らと思っただけ交流ができなかったことである。もっと多くの



図9 Dr. Krzicと長期海外研修生たち(2019年)

授業や研究会に参加できれば理想であった。到着した4月はすでに春学期の終盤に近づいた頃であり、授業は全て遠隔であった。それは中部大学よりはるかに徹底したものだった。教員も職員もほとんど学内にいない。ミーティングもほとんど遠隔であった。多くの建物は特定の曜日にしか鍵が開いていないという状況であったのだ。コロナ禍でなければ、もう少し人的な交流ができたのではないかと悔やまれる。しかし、これは予想したことであり、どうしようもないことでもある。早く図9のようにオハイオ大学での「長期海外研修」が再開され、両大学間でまた自由に交流ができるようになることを願って止まない。

6 おわりに

新型コロナウイルスに翻弄され、制限の多い半年間のサバティカル生活であった。だが、これは世界中どこにいても同じであろう。わかっていたことである。それより、その制限ゆえに二度とないユニークな経験と直接的な文化観察ができたと言うべきであろう。事実、アメリカ人やアメリカ社会に関しては、再発見する部分や再認識する文化的側面も多かった。

最後になったが、このサバティカルを可能にしてくれた中部大学、特に不在中の仕事や授業を引き継いでくださった学部・学科の先生方、国際センターの教職員の皆様、人文学部事務職員の皆様に深く感謝を申し上げます。海外での快適な日常生活を可能にしてくれた妻と愛犬Juniorにも感謝する。皆様、ありがとうございました。

**American Culture Reflected in the Chaos of Covid-19:
A Report of my Life on Sabbatical Leave at Ohio University, Athens, Ohio**

SHIOZAWA Tadashi^{*1}

*1 Professor, Department of English Language and Culture, College of Humanities, Chubu University